

草庵仏教

第141号
(発行日)
2002年3月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638126 西宮市
小松北町1-2-3
電話・FAX(0798)
41-5346
(発行人) 土井紀明
メール naridoi.ne.jp@lycos.ne.jp
http://members.tripod.co.jp/souan211

《 開法会ご案内 》

- * 同朋の会 (念佛寺)
22日午後2時
.....
- * 聖典講座 (念仏堂)
第1土曜日午後3時
- * 念仏座談会 (念佛寺)
第3土曜日午後3時

弥陀・釈迦・親鸞

W 「真宗のお話しには、阿弥陀様、お釈迦様、親鸞様、ご本尊様という言葉をよく聞きますが、よくわかりませんので教えてください」

J 「まず、親鸞様ですが、親鸞様は一一七三年(平安末期)に京都宇治の近郷、日野の里にお生まれになり、一二六二年(鎌倉初期)に九十才でおかくれになった仏教者です。親鸞様が一生かけて了解し、明らかに教え示された仏教、それが真宗あるいは浄土真宗なのです。それで後世、真宗の開祖あるいはご開山とよばれています。ですから真宗というのは本来教団の名ではなく親鸞様の明らかにされた教法の名です」

W 「ではお釈迦様とは」
J 「親鸞の明らかにされた仏教が真宗ですが、その仏教はお釈迦様の説法から始まります。お釈迦様は世界的な仏教学者・村元博士の説では、紀元前六四三年に北方インド(現在ネパール領)のカピラヴァスツの郊外(ルンビニ)でお生まれになり、八十才でクシナガラにおいて入滅された仏教の開祖様です。三十五才頃に悟りを開かれたといわれています。悟りとは簡単に

申しますと、万人が依りどころとすべき永遠の真実を明確に認識したことです。その永遠の真実を(法)といい、法と法を悟る道をこの世で最初にお説きになられたのがお釈迦様です」

W 「そうするとお釈迦様は人間なのですね」
J 「ええそうです。そうですが真実に目覚めたお方(正覚者)という意味で仏陀(仏)ともいわれます。いわゆる釈迦牟尼仏あるいはゴータマ・ブツダともよばれています。その仏陀の説法の内容が今日まで伝えられたものが経典(お経)です。古来、経典は五千余巻あるといわれています」

W 「膨大な数のお経ですが、それらはすべて紀元前5世紀頃に出られたお釈迦様の説かれたものですか」
J 「すべての経典が歴史上のお釈迦様によって説かれたわけではなく、お釈迦様が正しく覚つた者(仏陀)になられて後に、お釈迦様が説かれた真実の道にしたがって修行し、同じ真実を悟つて仏陀になられた方々が誕生していった歴史があります。そうした仏陀たちの説法もお釈迦様の名において説かれ、今日仏教経典として伝えられています」

W 「お釈迦様の説法によって、お釈迦様と同じく悟りを開かれた仏陀たちが次々と誕生し説法されてきた伝統があるというお話しですが、その仏陀の悟りの伝統はその後どうなつていったのですか」

J 「その点については現在、研究と考察が続けられています。最初のお釈迦様(ゴータマ・ブツダ)から(悟りの伝統)はおおよそ数百年続き、その間に沢山の経典が説かれてきたともいわれていますが、ここらあたりはこれからもっと明らかにされていくでしょう」

W 「お経とは、仏陀の説法の内容であり、最初の仏陀がお釈迦様。その後、お釈迦様の説法という形で経典は説かれてきたのですね」

J 「あまり良いたとえではないですが、歌舞伎などで例えれば初代市川團十郎が出て、2代目、3代目と市川團十郎の名で歌舞伎の伝統が受け継ぎ伝えられています。正しく覚つた者(仏陀)たちの説法の伝統は、最初に完全に覚られたお釈迦様の名において説かれた形で伝えられていったのでしよう。私は大体そのように理解しています」

W 「仏陀たちは個人の名に執着は無かつたのでしょうか」

J 「ええそう思います。こうして仏陀の説かれた沢山の経典は種々様々な内容であり、また広

大で豊かな内容をもっております。それらの経典の中から、親鸞様は阿弥陀仏の救済について説法されている経典をご自身の依るべき経典とされました」

W 「それはどういうお経ですか」
J 「仏説無量寿経、仏説観無量寿経、仏説阿弥陀経で、合わせて浄土三部経と呼ばれています。この三つの経典の中で、根本になる経典は仏説無量寿経です」

W 「では阿弥陀様とは？」

J 「阿弥陀様はお釈迦様とか親鸞様のような人ではなく、量りなき真実の働きであり、(永遠普遍の真実まこと)をいいます。仏陀は永遠普遍の真実(法)を浄土の経典において阿弥陀仏と説かれました。無量の智慧と慈悲の阿弥陀仏はいつ、いかなる時も、万人のいるところに救いの活動をなしたもうていと説かれています。仏陀が阿弥陀様の救済の働きを悟りの智慧で感得されて、それをお説きくださったのが浄土三部経です」

W 「弥陀の本願といわれるのが、阿弥陀仏の救済活動のことなのですか」
J 「そうです」

W 「阿弥陀様の本願の働きは永遠無限だということですが、お釈迦様がこの世に出られるまでは人間はわからなかつたのでしょうか」

J 「お釈迦様が出るまでに感得した人はあつたと思います。し

かし、阿弥陀様をハッキリと自覚し、しかもその活動を正確に説くことは非常に難しいことだと思えます。やはりそれはお釈迦様を待たねば、この世の人々に説いて教えることは出来なかつたといつていいでしょう。

まあ卑近なたとえで言えば、アラビアの砂漠の地下に石油がどれほど埋蔵されていても、それに気が付かなかつたら宝の持ち腐れだったのが、初めて気が付いて掘り当てた人がいて、石油のあることを指示して地上の人を豊かにしたように、初めて気が付いてそれを正確に言葉で表現されたお釈迦様が出ないことには、阿弥陀仏の大悲の救いは世の人々に知られないままですから、人々が阿弥陀様の救いにあずかることは極めて困難だったということですよ。ですから阿弥陀様を私どもの救い主というなら、お釈迦様は教え主すなわち教主といえます」

W 「わかりました。お釈迦様も親鸞様もこの世からお隠れになつても、阿弥陀様は今も私たちに働きづめ、かかわりづめに私たちが救おうとしておられるのですね。ところで、浄土の經典が世の中に現れたのはいつ頃ですか。」

J 「阿弥陀仏の救済についてお釈迦様（仏陀）が説かれてから、人から人へと口づたえに、いわば聞いた人が記憶し、その記憶

されたものが次の人に伝えられ、また次の人が聞いて記憶するという具合に伝わっていったのでしよう。現在でもインドでは、宗教的な聖典を修行者はすべて記憶してしまうのです。そしてそれを弟子に暗唱させて記憶させていくという伝統があります。

お釈迦様によって説かれた弥陀の本願は口伝えに伝わっていったのですが、紀元一世紀前後からターラ樹の葉に文字で書かれるようになったといわれています。サンスクリット語で書かれ、それが中国にもたらされて漢字に翻訳されたものが日本へ渡つてきました」

W 「そのようにして日本にもたらされた浄土の經典を親鸞様は読まれたのですね」

J 「ええそうです。ただこれらの浄土の經典の中に説かれている阿弥陀仏の救済を親鸞様が正確に深く理解するには先達のご教示を経て初めて可能だったと思えます」

W 「先達というのはどなたですか」

J 「親鸞様にとつてことに尊ばれたのは七人の高僧です。インドの龍樹菩薩、天親菩薩、中国の曇鸞大師、道綽禪師、善導大師、日本の源信僧都、法然聖人の七人です。これらのお導きを通して、浄土の經典に説かれている弥陀の本願が万人の救いであるという真実性が明らかになつたのです。悟りの智慧から説

かれた浄土の經典を正確に深く読むことは決して容易なことではありません」

W 「七高僧のご指南の伝統を通して、浄土の經典を読み、そこに説かれている弥陀の本願の普遍的な真実を見いだされたのですね」

J 「そういつていいと思います」

W 「今一度まとめてみますと、お釈迦様が悟りを開かれ、悟りの智慧によって感得された阿弥陀様の救いの働きをお説きになつたのが浄土の經典であり、その思い召しを七人の高僧方のお導きを通して浄土の經典を読み、そこに説かれている阿弥陀仏の救いを明確にお示しになつたのが親鸞様。その親鸞様が私どもに説きひろめてくださったみ教が真宗なのですね」

J 「ええそうです」

W 「ではご本尊様とは何ですか」

J 「本尊という意味は私たちの人生にとつて根本的に尊い働きという意味とお聞きしています」

W 「芸術鑑賞でいうような仏像という意味ではないのですね」

W 「よく彫像について使われる言葉ですが、教法の上での意味とは違います」

W 「では真宗のご本尊様は何ですか」

J 「南無阿弥陀仏の名号です」

W 「阿弥陀仏ではないのですか」

より積極的にいえば南無阿弥陀仏だといえましょう」

W 「なぜ南無を付けねばならないのですか」

J 「阿弥陀仏だけですと先ほど申しましたが、無量の寿命と無量の智慧と無量の慈悲の仏様という意味ですが、南無阿弥陀仏となると、私たち一人一人に南無せよと喚びかけたもう阿弥陀様という、積極的に私たちに関わりたもう意味が表されてきます」

W 「南無せよとはどういうことですか」

J 「南無とは帰命（きみみょう）という命（仰せ）です」

W 「帰せよとは」

J 「これについては親鸞様が（よりのむなり、よりかかるなり）と註をしておられますから、帰せよとは（依りたのめ）ということ、（我をたのめ、まかせよ）とのいわれです。

南無とは帰命で、たのめの仰せ。その仰せは阿弥陀様の仰せですから、南無阿弥陀仏は（我をたのめと仰せくださる阿弥陀様）という意味になります。阿弥陀仏が私どもに深く関わり給い、今ここに（我を依りたのめ、まかせよと仰せ下さる阿弥陀様）が私たちとともにまします姿が南無阿弥陀仏のご本尊様です。南無阿弥陀仏の名号についてはまた別に詳しく申し上げますこともありましょう」（了）



雪見灯籠 (C)SHOGAKUKAN INC.

〈住職つれづれ日誌〉

先月（一月）の末に同朋会館へ。岐阜の門徒会員の人たちの研修であった。人数は十人ほどで熱心な方が多く、半数の人たちが「念仏の意味を教えてください」という強い希望をもっておられた。同時に「念仏の意味をハッキリと教えてもらえない」との嘆きを聞いた。この希望と嘆きは岐阜の門徒だけの思ではないと感じた。真宗に最後に残るのは南無阿弥陀仏であるが、その意味が分からないままの真宗門徒が多いのが教団の現状のように思う。

二月二十一日。朋友会の学習。八尾のU師の発表。U師の謙虚な態度と奥様の開法のお姿には敬服せざるを得ない。

二月二十四日。Nさん宅のご法事。鳥島の青瀬から親戚のKさんが来られていた。甌で何度も私に会つたことと親しく話しかけてこられたが、申し訳ないことに思い出せない。青瀬は私が出た長浜の隣村で、縁あって何度もお参りしたことがあり、知つた方は少しはいたがお名前が殆ど忘れてしまった。二十年近くも前のことになるお顔の風貌も異なり思い出せない。Kさんは栖雲法兄と今でも親交があるとのこと、法兄の話が出て大変懐かしかった。もう一人女性の方もおられた。から「親鸞踊り」を教えて貰つたこと。こと。（親鸞踊り）は八尾別院にいた時、大阪市生野区の坊守さんだった高橋様（故人）から教えていただいた。

歎異鈔 第十一章第九講

「このひとは、名号の不思議をも、また信ぜざるなり。信ぜざれども、**辺地・懈慢・疑城胎宮にも往生して、果遂の願のゆえに、ついに報土に生ずるは、名号不思議のちからなり。これすなわち、誓願不思議のゆえなれば、ただひとつなるべし**」

(第十一章)

「名号の不思議を信ぜざる」人とは、名号にかけられている誓願の不思議を信じない、あるいは信じることができない人です。しかし信じられない人も、

「念仏申しておれば、果遂の誓いによって自ずから救われてゆく。念仏というものは本願を支持するところのものであり、仏心の電気の伝わりとところの電線でありますから、それに親しんでおるうちに自ずから老少善悪の人を選ばない、何人も捨てないところの廣大無辺の境地に入らしめられる。それがすなわち真実報土の往生を遂げることであります」

(「歎異鈔聞思録」より)

と金子大栄師は申されています。弥陀の本願は「称我名字」(我が名を称えよ)と願ひ、「若不生者」(もし生まれずば)と救いを誓いたもう本願です。ご和讃にも

「縦令一生造悪の

衆生引接のためにとて

称我名字と願じつつ

若不生者とちかいたり」(高僧和讃)

と聖人はお示しです。

ところが、自己能力への過信のため、弥陀の本願におまかせすることが出来ないまま、「我が名を称えよ」という第十八願の表面だけをつかんで、(念仏しさえすれば助けてくださる)と受け取り、念仏を続けて行く人たちが多いためです。それは、法然聖人や親鸞聖人のように、(いづれの行もおよび難き身なればとても地獄は一定すみかぞかし)という、自分の力が破綻してしまつて自分をどうすることもできないという実感がなかったため、「ソノママなりを引き受ける」の思召しである「我が名を称えよ」の絶対の大悲がただけぬまま、なお称えることのできる念仏の形にとりついてしまふのです。そして、念仏申すことを励むことによって、自らの救いを確かなものにしようとするのです。

しかし、こういう姿になつてしまふ者をも、何とか真実の世界に導き入れたいという阿弥陀仏の大悲は、「果遂の誓い」(二十願)を建てて、自力の念仏を励む者をやがては真実の世界に入れしめようとご方便くださったのです。

そういう二十願の念仏を励んで、自らが励んだ念仏の効果でもって救われようとする者が生まれる浄土をここでは、**辺地とか懈慢(界)とか疑城胎宮**とかいわれるのです。

この**辺地・懈慢(界)・疑城胎宮**というのはすべて方便化土といわれる浄土のことです。

方便化土は真実報土に対する言葉で、真実報土とは**大般涅槃界**としての真実の浄土であつて、それは法蔵菩薩の願と行によつて、報(あらわ)れた浄らかにしてまことの浄土といわれています。

一方、方便化土というのは、自力へのこだわりがあつて、なお本願を疑い、自分の為す行業によつて浄土の往生を確かなものにしようとする、そういう、者を真実の浄土に往生させるために仮に設定された浄土です。いわば真実の浄土へ導くために教え育てる境界としての浄土です。ですから、方便化土は真実報土に比して、**辺境の、辺鄙なイメージ**から(「**辺地**」と大経に説かれています)。

また**懈慢界**という言葉は、方便化土に生まれる者は、自分の能力に対する**憍慢**心のために弥陀を一心にたのむことが出来ないで慢と示されているのでしよう。また**慢**があるということは、自己信頼が強いゆえに、おのずと(これでよい)と腰を下ろして自分の今の状態を肯定してしまふのです。ですから「この衆生、その本の罪を識りて深く自ら悔責してかの処を離れんと求め」(大経)ないのです。自力をたのんでいる状態から離れることを求めないので。こういう者の生まれる浄土をその行者のあり方から**懈慢界**と名づけられるのでしよう。

さらに**疑城胎宮**とはイメージ的に表されたのでしよう。まず疑城というのは疑いの城ということで、城壁に囲まれた中にいるように、自力の行者は本願を疑惑する心の壁に囲まれて、疑いの城の中に閉じこもっている状態ですし、それはあたかも母親の胎内にいるように、胎児が閉じこもってしまふ外に出て自由になつていない状態から、胎宮といわれるのであります。

本願を疑っている状態というのは、己の善悪によつて、いわば自分の状態の善し悪しによつて、自分が救われるかどうか、あるいは救われているかどうかを決めようとするので、どこまでも自分の心のあり方や姿にこだわっているのです。だから開放感がないのです。いつてみれば、自分を見限つてゆつたりと阿弥陀仏にゆだねることができなくて、自分の心や行いの善し悪しに縛られているのです。

ですから方便化土の浄土は本願を疑う罪を除かんがために阿弥陀仏が設けた領域であるとともに、**仏智を疑う者自身の想いが描き出した世界**といえましよう。真実の働きの性質と行者の虚妄心の生み出したものが交わつている仮の世界ということ化土といわれるのではないかと思ひます。

なお**辺地・懈慢・疑城胎宮**ここでは自力疑心の者が死後に生まれる方便化土の浄土として説かれ、真実の浄土の「**かたほとり**」(宗祖の言葉)の世界であるといわれています。

けれども方便化土の境界は死後だけでなく、この世において、自力疑心の行者の心の境界として、すなわち、この世において自力の行者が疑惑の想念の中に閉じこもり、そこに腰を下ろしてしまふ状態を、化土あるいは化土の往生という教説によつてお示しくださつていられるといえましよう。

なおこの歎異鈔の著者は、とにかくも本願を疑いながらも念仏を称え続けて行く人は方便化土にしばらくは留まるけれども、やがて阿弥陀仏の果遂の願力によつて真実の浄土に生まれるのだ、というあたたかいまなざしで自力念仏の行者を見ております。

(了)

美濃のくめ子曰く。私の心は明けても

信仰夜話

暮れても地獄へ引きこむことにかかりは
てたるを、阿弥陀様の仰せには、へおくめ
その心にはまかせな、我にまかせよ、そ
の心は地獄へ行かばやれ、その方は我が
助けるほどにくと仰せらるるゆへ、はいは
いと御うけ申してお稱名書ばせてもらい
ます。

又日々の相続は我が身のあさましさを
みては「本願の尊さを思い、本願の
尊さを仰ぎては我が身の浅ましさを思
い、繩のようにお慈悲に纏いつかれ、我機
に法が離れて下されぬから、命終わるま
で繩のように相続させてもらおう」と

（「染人百話」より）

以上の言葉は美濃（今の岐阜県）に居
られた、くめ子という信心の厚い門徒
女性の言葉として伝えられている。

「私の心は明けても暮れても地獄へ
引きこむことにかかりはてたる」

くめ子さんのこの告白は決しておかげ
さではない。日々、心に思いと想うこと、
まことに妄念煩惱がほとんど。まことら
しき心はかすかである。死ぬことを恐れ、
病気を苦し、食うていけるかどうかを
案じるなど、思い煩いで一杯な我が心。
損だの得だの、あの人がどうの、この人
はこんな人だのと高上がりして批評して
いるままが地獄種を作っている。まこと
にこの心は（万劫の仇）である。己の心
ほど己を惑わすものはない。苦しみの世
界に引きづりこむことにかかり果てて

いるのが私の心である。

自分の思っている（思い）を本気にし、
大事にし、自分の考えや思いの内容を「正
しい」と思いこんで少しも疑わず、自分
の考えにこだわり続けて自他を苦しめて
いるのが日常生活である。欲や怒りや憎
しみが起こってときは、ことに自分の（思
い）に振り回されやすい。怒りの感情が
くすぶっている状態で考えている内容は、
さらに自他を苦しめる因となる。欲
や怒りだけでない、この世のささいな利
害にこだわって仏法をおろそかにする心、
法を何とも思わぬ心、仏法を軽んじる心、
本願を疑う心、皆、地獄行き心である。

「阿弥陀様の仰せには、おくめその
心にはまかせな、我にまかせよ、その
心は地獄へ行かばやれ、その方は我が
助けるほどに」と

煩惱だらけの私にたまわるお念仏。こ
のお念仏が真実そのものである。お念仏
以外は煩惱妄念といって過言ではない。
お念仏の仰せは弥陀の仰せである。「汝、
煩惱の心を汝でどうすることもならぬ、
その心はおいておけ、汝自身はこの弥陀
が引き受ける。いかに罪深き者なりとも
汝を助ける弥陀がここにいて」と仰せら
れる。

阿弥陀仏の仰せくださる「おくめその
心にはまかせな」とは、自分の心を当て
にするな、たのみにするな、買いかぶる
なであり、己の考えで助かるに非ず、不
思議な弥陀の誓いで助かるのであり、自
分の思いは少しも役に立たず、弥陀が「汝
を引き受ける」と決定したまう大悲によ
って助けられるのである。

「はいはいと御うけ申してお稱名書
ばせてもらいます」

煩惱妄念の固まりよりなく、死の闇に
消えていくより仕方なき私に寄り添いた
まい、「私がついてくる。心配するな。お
前を助ける弥陀がここにいて。我にまか
せよ」と仰せくださる弥陀の仰せに「は
いはいと御うけ」するばかりである。そ
のまま「ハイ」と聞くばかり。極めて単
純、理屈も道理もない。幼子が親の言う
ことをその通りに聞き受けているような
ものである。あまりの有り難さに理屈離
れて、有難うといただくばかりである。
（有難う）という思いは自然に称名念
佛となつて流れ出る。

「日々の相続は我が身のあさましさを
みては本願の尊さを思い」

毎日お念仏を称え続け、聞き続けてい
く生活、それが念仏相続の生活。その相
続の様は、あきれるほど煩惱の盛んな我
が身、我が心の狭さ、醜さ、生活態度の
あさましさ、お粗末さを感じては、こん
な私に寄り添いたまい、受容したまい、
引き受けて浄化せんと立ち上がりたまい、
浄土へ生まれしめたもうところの南無阿
弥陀仏。その御本願の尊さを思つてナム
アマダブツ・ナムアマダブツと称えしめ
られていく。

「本願の尊さを仰ぎては我が身の浅
ましさを思い」

南無阿弥陀仏の姿は、罪悪深重の者を
助けんと仕上げてくださいった御名なれば、
「助ける」と喚ばれ続けている我が身は
（まるまる助けられねば助からぬ粗悪な
る身）なることを、（助ける）の大悲から

いよいよお知らせをこうむる。本願の大
悲の雨に打たれば打たれるほど、我が
身の粗悪さが知らされてくる。

「繩のようにお慈悲に纏いつかれ、我
機に法が離れて下されぬから、命終わ
るまで繩のように相続させてもらおう
と」

悪業煩惱の我が身に大悲の南無阿弥陀
仏が繩のようにまといついてくださる。
私が引き寄せたから阿弥陀様が来てくだ
さったのではない。引き寄せる力などは
私には毛頭ない。ただ空しく消えて行く
外ない身に、私の方からたのみもしない
のに、かわいそうとて阿弥陀仏がまとい
りついてくださる南無阿弥陀仏である。
その姿が口より出てくださるお念仏であ
る。そのお念仏が一生続いてくださり、
浄土に生まれさせてくださるのである。

（了）

【電話相談室】

（秘密厳守・匿名可・無料）

（時間）

午前8時より午後10時まで

（電話）

0798-41-5346

（相談内容）

人生上のいろいろな悩み・
信仰上の相談・仏事の相談
*相談員が留守の時がありま
すので予め承知ください。